

関西学院における大学紛争の歴史

— 関学革新評議会を中心に —

木村 浩造

一九六八年から約二年間、関西学院大学において、東大をはじめとして全国で始まった大学紛争が大きな傷跡を残しました。ノンポリと言われた多くの一般学生は、全共闘による校舎のバリケード封鎖で学校が休校となり、授業も試験も無くそれぞれ好きな時間を費やしていたようです。一方で、何とか大学紛争を終結させようと活動したグループがいたことはあまり知られていませんが、紛争解決に取り組んだグループ（関学革新評議会）の責任者の一人として、関西学院の歴史の一端を整理したいと思います。もう一人は、中学部からの同期生で関学を愛する平松一夫君（現理事長、元関西学院大学学長）です。

当時の新聞記事や資料で記憶を呼び覚まし、私の見聞き体験した事実などを中心に整理しますが、一部で記憶間違いや偏る部分がありましたらご容赦下さい。

1. 私の関学時代

平松君については改めて紹介する必要は無いと思いますが、大学紛争は二人の中で大きな思い出です。紛争の歴史を整理すると同時に、私がどんな関学生であったかという歴史もご紹介したいと思います。

私は、一九六〇年に関西学院中学部に入學し、高等部と大学（商学部／笹森ゼミ）を含めて一〇年間関西学院で学びました。故矢内正一中学部長（元関西学院理事長）の薫陶を受け、勉強とスポーツの両立を目指すべく努力を続け、中学から大学まで陸上競技部で主将を務めました。高等部三年時には、四〇〇Mで兵庫県高校新記録を樹立し、岐阜国体に兵庫県代表として参加して四〇〇M決勝で七位となりました。

大学時代は、四年で卒業して五年連続関西制覇をした、数少ないというか唯一の学生かも知れません。というのも、一年生から四年生まで関西制覇をしましたが、体育会の覇業交歓が一月三日に開催され、その日以降は翌年の実績となっていたので、一月八日から開催された西日本学生選手権の四〇〇Mで優勝し、五年連続制覇となった次第です。これとは別に、ほとんどの人が知らない歴史もありました。

実は、当時のアメリカンフットボール部の武田監督からアメリカンフットボールのランニングコーチを依頼され、



(王子公園陸上競技場にて)
【提供：神戸新聞社】

中学部からタッチフットボールに親しんでいたこともあり、ボールを投げたり受けたりするのはそれなりに出来たので、一二月末開催の「甲子園ボウル」に、相手（日大）の全く知らない秘密兵器として出場する準備をしていました。試合開始と同時にサイドラインを思い切り走り、ロングパスを受けるといのが一つのフォーメーションでした。無警戒の中うまく受けられたら一気にタッチダウンにつながる可能性があり、ダメでも敵の作戦を紛らわせられる秘密作戦でした。当時、五〇Mは六秒〇、一〇〇Mは一秒〇で走っており、防具を付けてもそれなりのスピードで走る体力はあったと思います。目立つように白いスパイクを新調してもらって履く予定でした。しかし、五年連続関西制覇をした西日本学生選手権の最終種目で肉離れをってしまったため、残念ながら「甲子園ボウル」への出場は出来ませんでした。当時の、武田元監督と二人の秘密として、関学が甲子園ボウルに出るたびに思い出す、いつまでも忘れられない青春時代の一つの歴史となっています。

少し長くなりましたが、こうした関学学生がいたのも一つの歴史で、紛争解決に取り組んだ一因です。

2. 「学費値上げ反対運動」が始まる（参考…「関西学院百年史」）

一九六七年秋ごろから、学校側の学費値上げの動きが本格化するにともない、中央講堂での説明会などが開始されました。説明会には、一般学生として参加していましたが、昼から始まった説明会が、夜遅くまでかかるのには参った記憶があります。中央講堂での学生集会では、ヘルメットや竹槍での武装姿もなく、学校側と学生代表との議論が戦わされていました。この頃は、多く

の学生の中で、まじめに値上げの是非について論じあっていたように思います。「大衆団交」という言葉を、この時初めて聞きました。

そして、学校側の対応の悪さなどから、学費値上げ阻止を掲げてスト権確立の動きが活発化して行きました。学費値上げ阻止運動としてストライキ権投票があり、多くの学部でスト権が確立されることになり、バリケード封鎖による無期限ストに突入していきました。身近にバリケード封鎖を見るのは初めてで、当時、学校側と学生代表と言われる人達の動きは、あまり分からなかったのが現実です。そうした中、われわれ体育会学生は、多大な不便を感じながらも、日々の練習だけは継続していました。

年が明けた一九六八年一月には、一時ストライキに投票した学生も、バリケード封鎖に対する違和感が大きくなり、ストをしていた学部も、スト反対を決議して封鎖解除を進めようとなりました。まず、私の所属していた商学部がスト中止を学生会で決議し、他の学部も順次スト中止の決議をすることになり、バリケード封鎖が解除されていきました。その後、学校側が、バリケード封鎖をした学生の処分を決定したことから、新たに「処分撤回闘争」として再燃することになりました。

3. 卒業式当日の学院本部封鎖と初の機動隊導入（大学紛争拡大の兆し）

一九六八年三月二八日の卒業式当日の午後、正門を入って左手にあった「学院本部」が、全共闘により封鎖占拠され、小宮学院長他数名が軟禁されるといふ事態が発生しましたが、本格的な武力による紛争の始まりではなかったと思います。私は大学二年生の終わりを迎える時で、練習



(占拠された学院本部前で対応する一般学生)

を終えて急いで駆け付け、建物をバリケード封鎖する全共闘学生達と対峙しました。石やレンガが飛んでくる非常に危険な状態で、果敢な体育会系学生や一般学生がベニヤ板で防戦しましたが、それ以上の手立ても無くにらみ合いが続きました。私は、前列でベニヤ板を支えていましたが、途中で交代した直後に、私が支えていた場所に居た学生の顔面にレンガが飛んできて、前歯を折られることになったのは、申し訳ないですが不幸中の幸いではなかったかと思えます。

こうした紛争状況は初めての経験でもあり、原始的な戦争のはじまりを感じました。封鎖は長時間にわたって硬直状態が続き、素手で何の道具も持たない無力な学生達で、武装した全共闘学生達を退去させ封鎖解除をすることは出来ず、学院の要請によって初の機動隊導入がなされ、無事封鎖が解除されました。この騒動より、午後から予定されていた卒業式は中止となりました。

全国各地で起きていた大学の武力紛争が、自分たちの身近で実際に起きることに驚き、今後にな少し不安な感じを抱いたように思います。

卒業生の中の一部の人達が全共闘に対峙する小競り合いも見られましたが、大きな問題にはな

らなかったようでした。

封鎖解除後は、全共闘組織メンバーが逮捕されたことなどもあってか、大きなトラブルは起きず、全共闘学生による小規模なデモが校内で行われる程度で、多くの一般学生は、通常と大きく変わらない学生生活を送っているようでした。ただ、学生の紛争を阻止するためか学生活動費が凍結され、体育会活動の資金提供がされず、練習環境の悪さを含め不自由な学生生活となりました。試合参加や遠征なども全て自己負担となり、下宿生などの負担は大変でしたが、OBの方々の支援金が支えとなっていたようです。

私は、例年通りの試合に参加し、五月に開催された関西学生選手権（関西IC）では、四〇〇Mにおいて大会新記録で優勝するなど、経済的な面や練習環境などに不便を感じながらも、秋まで試合を順調に消化することが出来ました。一方、全共闘では逮捕者の解放を含めて闘争準備が進んでいたようでした。

4. 大学紛争が本格化（「六項目要求」）

一九六〇年代後半から、全国的に左翼系学生集団を中心とした大学紛争が勃発し始めていましたが、各大学で紛争の要因となったテーマは違っていたようです。関西学院の場合は「学費値上げ」が主たる紛争要因でしたが、紛争中に全共闘の幹部に聞いた話では、学生を扇動して運動に参加させるためのテーマであり、彼ら組織の本来の活動目的ではなかったようです。ちなみに、東大紛争の要因は、大学に退学処分された学生の「処分の白紙撤回」でした。全共闘組織の本来目的は「革命」であり、バリケード封鎖された校舎の壁の落書きには革命の文字が多く書かれており、

学費値上げはサブテーマであったようです。

紛争に多くの学生を参加させて紛争を拡大するためには、多くの学生が反対しやすいテーマが必要で、関学が学費値上げを打ち出したことで紛争テーマとされただけで、純粹に値上げ反対に賛同したまじめな学生達が付いて行って大きな運動となったものと思われまます。

一九六八年一二月頃から、学費値上げ反対に加え、学生の処分撤回を求める全共闘の活動として「大衆団交」を求める声が大きくなり、学校側との交渉が進んでいたようでした。

その頃、全共闘から学校側に提示されたのが、いわゆる「六項目要求」というものでした。

①四三、四四年連続学費値上げの白紙撤回。②不当処分の撤回。③機動隊導入、操作協力の自己批判。④文学部学科制改変白紙撤回。⑤学館の学生自主管理。⑥以上を大衆団交で、文書で確認せよ。

5. 第5別館の封鎖、全学集会

冬休み明けの新学期が始まる前日の一九六九年一月七日、全共闘が突如第5別館をバリケード封鎖し、関学でも本格的な学園紛争が始まることになりました。一方的な第5別館封鎖に反対する学生は、連日のごとく中央芝生で封鎖反対集会を開いたが、大多数の学生は事態の重大さを十分認識していなかったようです。

当初、封鎖反対集会の中心となって演説していたのは、



(スピーカーを持つ私と、演説する渡辺君)

文化総部の渡辺君であったと思います。私が協力して集会のサポートをするような即席の体制であり、組織といったものはありませんでした。この頃から、全共闘のヘルメット姿が目立つようになり、紛争の拡大が始まった感がありました。

一般に「アジ演説」と呼ばれる扇動的演説に、多くの比較的まじめな学生が踊らされた感があります。特に、顕著であったのが、一九六九年一月二四日、学院主催の学費値上げ説明会が中央芝生で開催されましたが、学院側の説明が不十分であったこともあり、中央芝生を埋め尽くした四、〇〇〇人近い学生達に学院当局に対する不信感が一気に高まり、全共闘のアジ演説に呼応する学生のデモが中央芝生で大きなうねりとなってしまいました。説明会が始まる前は、大した人数でなかったデモが一気に膨れ上がってしまい、この日が大学紛争拡大の分岐点になったように思われます。全共闘と学院に反感を持った学生の動きが活発になり、純粋な学生たちも紛争に参加するようになりました。

学院側の硬直的な対応が新たな問題となり、大学運営の在り方も問題となりました。先生方は、武装した学生運動家達に囲まれて、うまく対応する訓練は受けておられず、不得手な分野であったので気の毒でした。



(中央芝生を埋め尽くした学生達、この後混乱に)

全共闘にも多くのセクトが存在し、「学費値上げ」がまとめるための共通テーマでした。赤・青・黒などヘルメットの色で組織が区別され、後に赤軍という異常集団による過激な行動やセクト間対立の内ゲバなどが、世間の注目を集めることになりました。

6. 全共闘が暴力で入学試験阻止

中央芝生での全学集会が失敗に終わった後、多くの学部がバリケード封鎖されることになってしまい、二月七日から予定されていた入学試験の実施が危ぶまれるようになりました。そこで、体育館を試験場として利用することで入学試験を実施することになり、机や椅子があわただしく設置されました。

前日には、警戒の中をかいくぐるように、全共闘が火炎ビンで襲撃する事件がありました。入り口のガラスが割れた程度で、試験実施の大きな障害にはなりません。入試当日は、機動隊導入を阻止しようとする全共闘系学生達が体育館前に座り込み、入試実現をさせようとする良識派の学生がグラウンドから見守ることとなりましたが、最終的には「機動隊に守られた入学試験」として禍根を残すことになりました。関学受験を希望して勉強していた受験生にとっては、苦くて忘れられない思い出になったことだと思います。



(体育館前に座り込む全共闘系学生と阻止する機動隊)

入学試験の終了後、機動隊に追われて法学部に逃げ込んだ学生全共闘を排除したが、校舎内は廃墟と化し、鉄パイプや石と灯油缶が山積みになれ、教授室なども破壊の限りで見るも無残な状況でした。引き続き、封鎖されていた第五別館の解除が、投石・放火・火炎ビン投下などにより必死で抵抗する全共闘を、機動隊の大変な努力でなされました。封鎖解除のために二日間にわたる攻防は終結しましたが、女学生？を含む全共闘のメンバーは、こうした暴力的経験が人生でどういう意味を持つのか。投石や火炎瓶で危害を加えたのは、若気の至りでは済まされないのではないかと思います。また、籠城はしなかったが暴力闘争に参加した学生の多くは、今は反省して普通の生活をしているものと思われまます。

7. 「関学革新評議会」の誕生

第五別館が封鎖され、大学紛争が本格化の兆しを見せ始めたことで、関西学院のOBを含め内外で心配する人達も増えて行きました。特に、同窓の方々の心配の声が聞こえるようになりました。そうした中、関西学院中学部時代の恩師から電話連絡が入り、「大学紛争解決に尽力してもらえないか」との要請がありました。中学部三年で陸上競技部主将と生徒会の運動総部長を務め、大学になっても陸上競技を続けていて、大学の体育会に所属していた人脈から、私に連絡があったのではないかと思います。

中学部の恩師からの要請でもあり、学校あつてのクラブ活動であるとも考えていたので、当時の中学部生徒会役員を中心に組織化を図ろうと、急ぎ連絡の付く人に電話をして招集を掛けました。うまく連絡が取れなかったことや、個人的理由などもあつて、最終的に、故矢内正一先生の

薫陶を受けていた当時の中学生徒会副会長の平松一夫君が賛同して、一緒に紛争解決に取り組みことになりました。

私が、体育会が武力行動に走らないように抑えまとめる、平松君が文書活動と学校側との調整を行うことで役割を分担し、二人で事務局として組織化を図りました。二人の人脈を通じた同志集めを進めましたが、平松君の所属する「会計研究会」から、三木康彦君や佐渡照彦君などの優秀なメンバーに参加してもらえました。また、体育会からは賛同する同志として、多くのメンバーが参加してくれました。

そして、私や平松君が組織代表になるわけにはいかないと思い、対外的な代表として、紛争時は体調不良で練習を休んでいた陸上競技部の同期生大前宏一君に就任を依頼しました。大前宏一君は、全国インターハイ一〇〇Mの優勝者で、陸上界では著名な人材でもあり、弁も立つことから適任だと判断しました。組織名は、大学そのもののイノベーション（革新）も課題となっていたので、少し硬い「関西革新評議会」とし、組織代表の議長として大前宏一君が就任し、本格的組織活動を開始することになりました。

本格的な活動開始と相前後して、一年上の体育会系学生を中心に組織された「ブルーリボン」などとも一緒に、紛争の本格化を心配する関西学院同窓会／専務理事であった小原完三さんの自宅で会合を数回開き、情勢分析や対応策を検討しました。「ブルーリボン」はどちらかというと、武力で紛争を解決しようとする人達が多く、暴力を否定する我々「関西革新評議会」とは、意見対立をすることもありました。上級生を抑えるのは大変で、「暴力でやっつけたとしても、それはマスターベーション（自己満足）に過ぎず、本当の解決にはならない」と言々と、「お前は民

青か、表に出る！」などと、まるで内ゲバのような一触即発の場面も思い出されます。

また、紛争拡大を懸念された先輩諸兄からの支援も受けられるようになり、一番ありがたかったのは、活動拠点も無いことを知ったレスリング部OBの薩摩卯三郎先輩が、経営する「うどんすき美々卯」の「仁川寮」を使うよう取り計らっていただきました。仁川駅から近く、学校にも適当な距離にあったので大いに助かりました。また、週に一回程度の頻度で、美々卯での仕入れに合わせて、我々の食材として野菜などをトラックで運んでいただきました。布団などの寝具も完備されていたので本格的な合宿生活となりました。みんなで楽しく食材を料理することもあり、ある意味で楽しい学生生活でもあったように思います。薩摩先輩の意向を受けて、レスリング部員の多くが参加、商学部生の多かった水泳部員も参加してくれました。その他、賛同する他組織や仲間も増えて、学院正常化に取り組むことになりました。

アメリカンフットボール部は、部としての参加はしないと決議をしていたようですが、その他の部は個人の自由参加が原則であったようです。私の所属していた陸上競技部では、上級生に全共闘の武闘派隊長のような先輩がいたり、それぞれに考えを押し付けるようなことはせず、私は正常化活動に専念する旨を部員に伝え、キャプテン代行に部の活動を委託しました。一般の部員には申し訳ない気もありましたが、陸上競技だけが学生生活では無いと割り切りました。体育会の中でも左傾化する学生もいたようですが、そんなに多くではなかったように思います。

体育会は組織として動くことはせず、あくまで有志の活動として進めることを、体育会本部（川上本部長、橋爪副本部長）と合意し、体育会メンバーも含む学院の健全化を願う有志の会としました。こうした経緯もあり、体育会としての声明文を出しました。（全文を掲載）

声 明 文 - 体育会幹部会議 -

我々、関学体育会は、思想の違いを超越し、ともにスポーツ活動をする組織である。

この見解に従って、「六項目要求闘争」は、体育会の組織としては、関与すべき問題ではなく、各体育会会員は一学生として主体的に現在の問題に参加し、各学部自治会に於いて自己の意思を表明する立場をとって来たのである。

しかし、その後一月二十四日の全学集会以来、学院当局の不誠意無策さと全共闘の独断的行動が紛争の拡大を招き、ついに機動隊導入へ、さらに機動隊による実力封鎖解除と事態が泥沼化した。そして、二月十五日以来の学院の一方的臨時休校処置と全共闘による再封鎖となり、大半の学生が学校にも出て来ず、解決のメドがつかない状態である。

その間、体育会は、学院当局より何ら指示されたこともなく、体育会として動員をかけて組織で動いたこともないにもかかわらず、他大学体育会の既成概念から非常な誤解を招いている。

これは、我々体育会々員の如何とするところである。

そこで、この泥沼化した現状を無視して体育会は有り得ないという見解から、二月二十二日の幹部会議で、現在の紛争を再検討し、主体的行動を起こそうという趣旨の「関学革新評議会」を幹部会議のメンバーを中心に発足させることを決議した。しかし、この「関学革新評議会」は、体育会の付属組織ではない。

したがって、これは体育会会員を強制するものではなく、できるだけ多くの学生諸君の共通意見反映の場として発足したものである。

すべての学友諸君は、「関学革新評議会」に積極的に参加されることを希望します。

こうした決定は、全国の大学で紛争が拡大する中、まったく独自の関西学院らしいものと思われず。

当時、全国の大学で規模の大小は別にして大学紛争が蔓延しており、全共闘と体育会学生との武力衝突も多く見られました。大学側の経理不正が問題となって、全国最大規模の闘争となったのが日本大学で、全国的に名をはせた秋田明大全共闘議長が、日大を含む大学闘争を指揮していました。そして、日大紛争を抑え込んで解決の力になったのが日大体育会で、その縁から学校運営に入り込み、現在も牛耳っているように思われます。アメフト暴行事件で見られた体育会系OBを中心とした体質と力関係がその頃から続いているのは見事(?)なものです。早稲田大学も、大学紛争がありました。左傾化する学生が少なかったようで、当初から体育会学生が、全共闘活動が大きくならないように抑えていた感があります。

私を仁川寮まで訪ね、関東から学生を送り込むと申し入れて来たのが、早稲田の右翼学生組織「日本学生同盟」副委員長でした。関学体育会は暴力を否定、学校側との話し合いで紛争解決を目指していたので、即時お帰りました。平松君も私も中学部時代に故矢内先生の薫陶を受けていたこともあり、当時作成された文章に関西学院精神が多く盛り込まれており、他大学とは一線を画していました。

8. 「一般学生立ち上がり運動」を展開

一部の左翼系学生が学校を拠点に革命を目的とした破壊活動を尽くし、一部の右翼系学生が武力排除をするような構図は、本来の学校のあるべき姿ではなく、大多数の一般学生が立ち上がっ

て行動を起こすべきであると、一般学生も参加して紛争解決を進めるべきと訴える集会を何度も主催しました。しかし、集会の都度、全共闘の諸君は顔を隠しヘルメットと鉄パイプで武装した闘争スタイルで集会の邪魔をするようになりました。我々は一切武装することも無く集会に参加していましたが、全共闘が集会に暴れ込むようになると危険なので、腹に週刊誌と新聞紙をさらして固定して対応する時もありました。仁川寮を出る際、腹にさらしを巻くなど、ヤクザ映画さながらの光景もありましたが、懐かしい思い出です。

また、私が体育会の部室があつた業者食堂（現・学生サービスセンター）の二階窓から、全共闘の動きを見ていた際に、ヘルメット学生と目が合い、彼らが一斉に私に向かって来たので、一目散に現場から離れた記憶もあります。相手が誰だったか分かりませんが、私が体育会を動かしている人間と誤っていたのでしょうか。武力を振るわないように抑えていた人間なのに、勘違いもいいところです。

入学試験は機動隊に守られて何とか無事終了しましたが、入学試験が終わり、機動隊が引き上げた後は、再び全共闘が学部封鎖や同窓会会館までも封鎖するなど、暴力闘争の状態は変わりませんでした。

関学革新評議会としては、泥沼化した紛争に少しでも希望を与えたいとの思いから、一般学生を中心とした集会を開催して、学校改革などの考え方を主張する活動を地道に進めることとしました。

三月九日、第一回目の「一般学生立ち上がり」集会を体育館前運動場で開催しました。のぼりやプラカードを作って集会・デモなどの経験も無く、横幕やプラカードは私が書いたりしまし

だが、全共闘諸君とは全く違う字体で、上品なものでした。この集会に、全共闘が武装スタイルで取り囲み威圧行動を行いました。大きな武力衝突とはなりません。

三月一三日に、第二回目の集会を同じ場所で開催しましたが、広く社会に訴えることも必要と考えて、同時進行の形で、大阪駅前午後四時から「四八時間ハンガーストライキ」を実施し、学校に来て来ない多くの一般学生に訴えました。ハンガーストライキ実施に当たっては、阪神百貨店前の芝生の中に毛布を敷いて座り込み、通行の邪魔にならないように配慮することで、大阪府警の了承をもらいました。四八時間の断食はレスリング部員を中心に行い、ハンスト終了後は、阪神百貨店の中の「美々卯」で、うどんすきを食べさせることで頑張ってもらいました。芝生に「一般学生立ち上がるう」「関学革新評議会」と書いた横幕を立ててピラ配りもしました。うれしかったのは、関西主婦連の比嘉会長を含め数名のお母さんが、趣旨に賛同して一緒に座り込んでくれたことです。警察も見回りに来ましたが、整然と行動していたことと趣旨に賛同してもらっていたので、好意的な対応をしてもらえました。当時の新聞にも大きく取り上げられ、お母さんたちからも「関学生らしいね」と高い評価もいただきました。こうしたことも、関学の紛争が他大学とは大きく違い、現在でも当時のことが懐かしく感じられるのかも知れません。

三月一七日に、第三回目の集会を開催しましたが、集会の中に武装集団が殴り込みをかけて来たので、素手の我々は対抗することもままならず、ケガ人を出さないようにするのが一番と一目散に逃げることになってしまいました。素手では何もできない軟弱武装学生から逃げるのは、いい気がしませんでした。「逃げるが勝ち」とは言えないけれど、非常に残念な思いをしました。

三月二三日は、関学革新評議会と他の正常化を望む有志・団体と「全関学人正常化総決起大会」

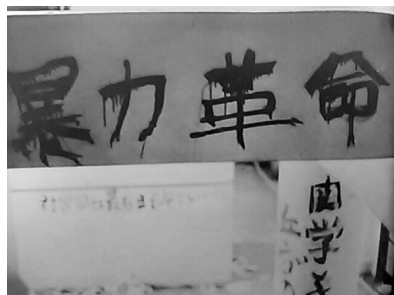
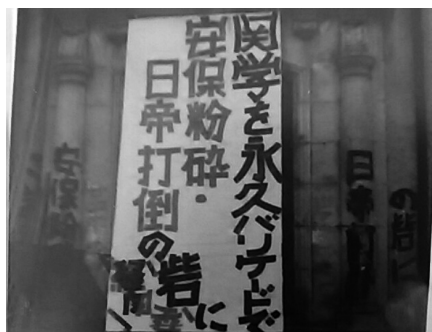
を開催、約一五〇〇名の学生・教職員・OBが結集して熱心に正常化に向けた討論が行われました。しかし、大学解体を叫ぶ全共闘の武装集団が、投石と鉄パイプを振りかざして妨害しました。素手の参加者は抵抗も出来ず、投石から逃げるしかなかったのが実情でした。そして、残念なことにハンドボール部の一年生が投石により片目を損傷するという重大事故が発生してしまいました。私は、集会の責任者として警察の聴取を受けていましたが、平松君達は病院に駆けつけてくれました。



(武装して隊列を組んで威嚇行動をとる全共闘)



(残された投げれない大きな石)



また、関学周辺住民の方々に、ヘルメットとタオルで顔を隠し、竹やりで武装した学生達が街中を走りまわり、石を投げるなど、大いなる危険を感じさせ、ご迷惑を掛けることになってしまったことは、誠に申し訳ないことでした。

投石した学生は覚えているのだろうか？ どうしているのか？ 私は主催者の一人として、本当に残念な思いでした。

関学を卒業後に、失明した川上君がハンドボールを続けて、関西ハンドボールの選抜選手に選ばれたと聞いたときは、本当に救われた気持ちでした。よく頑張ったと思います。

バリケード封鎖された校舎や建物には「暴力革命」や「安保粉砕」などの落書きが多く、「学費値上げ反対」や学校改革要求などは、実質的に関係なかったのです。こうした全共闘運動に関わった普通の学生が、投石などの破壊行為をしたことは、紛争なので仕方がないでは済まされないことだと思えます。全共闘リーダーは革命思想を持ち、「暴力革命」を標榜していたので、自分の思想を実現するための活動ですが、彼らのアジ演説に付いていった普通の学生にとって、大学紛争とは何だったのか？ 流れに任されて善悪の判断がつかなくなっていたのか？

法学部のバリケード封鎖を解除後、教授室などの破壊状況がひどかったので、商学部は破壊されないようにすべきと、無防備で単身バリケードに入り、当時の浜根反帝学評委員長に、一切教授室を破壊しないよう嚴重勧告したこともあり、封鎖解除時は全く手付かず状態でした。

こうした「学院正常化に向けた集会」と同時に、学生や教職員向けの文書活動も実施していました。当時の提言文やチラシ類も多く残っていますが、その多くが平松君の手によるもので、チラシは手書きの輪転機刷りがほとんどで、平松君の苦労は大変なものでした。そうしたものに、「一

般学生立ち上げられ！」と同時に、「教授会 信念を持って！」など、学校側に対する訴えもしていました。OBからの支援やカンパを中心に活動し、OBの方々の母校を愛する気持ちが我々の活動の原点であったかと思えます。

学校のあるべき姿にも触れ、開かれた大学として民主化を求める提言もしていました。学校側も、紛争解決に向けて、良識的な学生の意見も聞きたいとのことで、当時の小寺学長と平松君と私の三者会談も実施しましたが、学校運営の改革など学校側の前向きな取り組みを要請しました。保存されている当時の作成文書の見出しを抽出しましたが、我々の取り組みの基本姿勢が良く分かっただけかと思えます。

関学革新協議会は、準備段階で多くの同志を集めて、正式には二月二三日に発足させることになり、それ以降は、集会での配布用も含めて多くの資料を作成することになりました。(以下に記載)

- 3 / 5 一般学生立ち上げろう!! 関学革新評議会よりアピール
- 3 / 8 教授会へ訴える! 関学革新評議会
- 3 / 13 立て!一般学生 | 崩壊寸前の関学の中で私たちは |
- 3 / 13 全関学人 一般学生の皆様に 関学革新評議会、学園民主化委員会
- 3 / 13 一般学生立ち上げろう!! 大学紛争に愛校心と理性の声を結集させよ
- 3 / 23 全ての関学人 | 3・23全関学人決起集会 | 関学革新評議会よりアピール
- 3 / 23 五項目提案 | 3・23全関学人決起集会 |
- 3 / 27 声明文 3・23集会を振り返って 関学革新評議会

○ 3 / 27 全教職員に訴える 教授会への要望 関学革新評議会

○ 3 / 27 意味ある正常化のために 関学革新評議会

※ 3 / 29 希望に満ちた学院建設のために — 私達の考えをここに述べる — 関学革新評議会

○ 4 / 16 関学再建のためにご理解とご支援を！ 関学を愛し関学を守る 関学革新評議会

○ 4 / 17 紛争の解決と意味ある正常化を 関学革新評議会

○ 4 / 26 関学の現状を憂うる皆様へ 関学を愛する会、関学革新評議会

○ 4 / 26 全共闘の暴走を許すな！ 一般学生立ち上げ！教授会信念を持って！ 関学革新評議会

○ 4 / 30 関学革新評議会 活動報告 (平松君の概要報告)

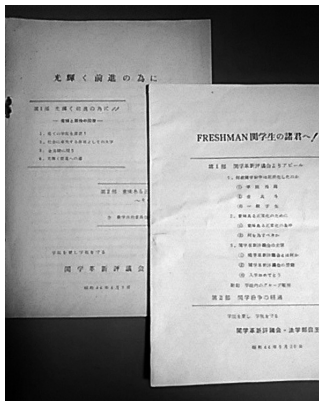
○ 5 / 3 — 紛争の解決と意味ある正常化を — 関学紛争の経過 関学革新評議会

○ 5 / 8 — 紛争の解決にフレッシュマンの力を 関学革新評議会 (文学部オリエンテーション)

○ 5 / 20 「FRESHMAN 関学生の諸君へ」(小冊子) 関学革新評議会、法学部自主連合

○ 6 / 1 「光輝く前進のために」(小冊子) 学院を愛し学院を守る 関学革新評議会

○ 6 / 1 全学集会に積極的参加を！ 関学革新評議会



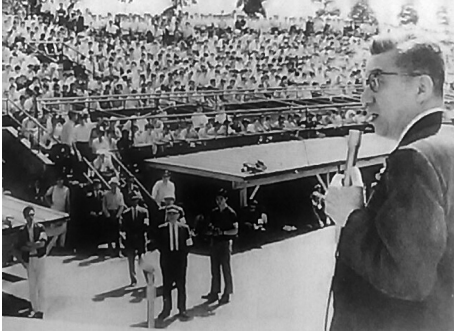
※学生向けの提言を作成、全学生約一二、〇〇〇名に郵送しましたが、郵送の封筒書きは、体育会各部に封筒書き要員の派遣協力を要請、各部から数名が指定時間に仁川寮に集まってくれ、不慣れた宛名書きをしてくれました。全国の大学でも、紛争解決に向けた体育会系学生のこうした献身的行動は、他大学では見られなかったかと思います。そして、大阪駅前での四八時間ハンガーストライキによる、多くの一般学生に対する呼びかけなど徹底した非暴力活動は、OB諸兄からの評価も良く、関西学院精神を発揮した活動を最後まで継続しました。

9. 正常化に向けた動き

三月二三日の集会で、全共闘の投石によりハンドボール部一年生の川上君が失明するという大惨事が起き、治療費支援資金を集めるため写真集『苦惱！—関西紛争の報告—』を発刊し、各地の同窓会に出かけてOBの方々のカンパを集める努力もしました。主に平松君と三木君が実施しましたが、学校を愛する気持ちは、先生たちと比較できないくらいの思いがあるとの報告もありました。

全共闘に付いていた普通の学生達も、彼らの暴力行為には賛同できないこともあり、徐々に人数が減っていったようでした。関学革新評議会としての集会開催に限度があり、学校側が前面に出て正常化に取り組むように要請しました。大学側も、小寺学長を中心に大学改革に取り組みだし、「廃校か否か」とのアンケート





(挨拶する小寺学長とスタンドを埋める学生達)

トを、全学生・職員に対し発送し、大学改革に向けて何よりも一般学生の意見を聞くことから始めるということで、学校側に対する平松君の根回しなどの成果ではないかと思えます。

五月に、扇町プールでの全学集会を企画しましたが、全共闘に阻止され実施には至りませんでした。しかし、このころから学生はもちろん教職員にも正常化に臨む思いと行動が本格的になりました。

六月九日、王子公園陸上競技場で改革結集集会の開催が決定、大多数の学生や教職員が参加して開催されましたが、全共闘の乱入により一時妨害行為があったようですが、スタンドを埋め尽くしていた一万名近い学生による包囲で退去せざるを得なかったようです。集会は、全共闘の退去後に全学集会として無事開催されました。

大学側の改革に取り組む提案も拍手で確認され、校歌斉唱のうちに改革結集集会が終わり、紛争終結のめどが立つことになりました。

しかし、残念なことに六月九日に開催された全学集会に、私が参加出来なかったことが心残りです。同じ六月九日に、無試験で入社を誘われていた住友金属工業(株)(当時、現日本製鉄(株))の社長面接があり、当時の日向方齋社長との面接において、同日神戸で大学紛争の終結に向けた全学集会が開催されていて、参加しなかったが面接のため参加出来

ないことの無念さを申し上げた。その後、社長と二人で学園紛争や学校の在り方などについて話が弾み、集団面接で一緒に参加していた他の学生は、ほとんど話が出来ずに集団面接終了時間が来てしまいました。入社して四年後に、京都で開催された鋼管特約店全国総会でお会いした際、『木村君、元気でやっているかね』と、名前を呼んで声を掛けていただいた時は大感激でした。入社前の面接における対応が印象深かったのでしょう。

神戸の改革結集集会で、上ヶ原キャンパスの回復と大学の正常化の決意が表明され、正常化に向けた決議がなされたことで、正常化に向けた手立てが着々と進みました。まず、キャンパスの解放を進めるため学長命で占拠学生に対し退去命令が出されました。

六月一三日早朝から機動隊により、大きなバリケード封鎖が解除され、正門やその他封鎖されていた門は解放され、キャンパスへの全面的な復帰がなされました。学内の校舎は荒れ放題で、机や椅子が散乱し、校舎は落書きだらけで、「革命」や「死守」など、彼らの本音を書きながら残っていました。キャンパスの回復に向けた活動には、我々も含め多くの学生が参加し、それぞれの学部の封鎖解除や清掃に汗を流すことになりましたが、六月の新緑の中、心地よい汗だったと思います。学校周辺地域の方たちも、回復されるキャンパスを眺め、少し安心した雰囲気でした。関西学院の美しい校舎にバリケードや落書きは全く不似合いました。関学革新評議会メンバーも積極的に学内の整理に参加、当時の図書館の時計台正面の落書きは、時計裏の部屋から外に出て屋根に上り、ふき取り作業を実施しました。

翌一四日は、中央芝生でキャンパス解放集会が開かれ、約五〇〇〇名の学生が参加し、久し振りのキャンパスを懐かしむと同時に、各学部の清掃作業が、教職員も一緒に進められました。

学院のシンボルであったヒマラヤ杉が無残にも切り倒されました。当日、学校改革の方針を説明した小寺学長から、新しいヒマラヤ杉を植えるとの提案もなされました。翌一五日も、日曜日を返上して清掃作業を行い、校内でミニ集会が開かれて、キャンパスには讚美歌が流され、関西学院らしさが取り戻され、一応終結をみる形となり、やっと新生関西学院のスタートを切るこ
とが出来ました。

しかし、全てがスムーズに行ったわけではなく、その後も全共闘の残党たちが、校内に入り込みトラブルとなったことで、機動隊が排除するようなこともありました。その後も授業妨害や一部校舎の封鎖をするなど、全共闘は小規模な活動を継続していました。我々の活動も、写真集「苦悩！」販売によるカンパ活動が残っていましたが、ほぼ後片づけに入っていました。

そうした中、七月二一日に、封鎖と教授軟禁つるし上げという出来事が起きました。関学革新評議会は、「左翼暴力団!! 城崎学長代行代理を軟禁してつるし上げる! 左翼の横暴を許すな!!」というビラを配布しましたが、これが最後のビラになったようです。

また、七月一八日、敬愛する故矢内正一先生が、関西学院の理事長に就任されるなど、正常化に向けた活動は着実に進められて行きました。

10. 大学紛争の個人的影響と終焉

陸上競技者にとって、重要な冬季練習がほとんど出来なかったため、四年生の最終シーズンは散々な成績でスタートすることになりました。例年は楽勝だった兵庫県大学選手権も、ギリギリの勝利となり、議長であった大前宏一君も、「ノレンを守った議長」の見出しで、地元新聞にと

りあげられました。

私は、前年度は大会新記録で優勝した関西学生選手権四〇〇Mで、新聞予想に反して予選落ちするなど、見るも無残な成績でした。学校あつてのクラブ活動とは言え、無残な成績のまま終わるわけにはいかないと思い、本来は冬季に実施する体力強化練習を夏休みに行い、秋のシーズンに備えました。努力のいかいもあつて、前年の記録まで戻すことが出来、関西実業団対学生大会で優勝したことで、太平洋沿岸五ヶ国大阪大会の日本代表にも選ばれ、黒人選手に勝つことも出来ました。紛争が無かつたらもつといい成績を残せたかも知れませんが、陸上競技では体験できない学生生活を送れたことは大きな糧になりました。

一〇年間お世話になつた関西学院で、故矢内正一先生の教えを少しでも実現出来たことは、社会人となつて以降も、自信を持つて語れることと思つています。「汝の運命の星は、汝の胸中にあり」との教えは、最後まであきらめずに努力することの大切さを、スポーツの中で体験学習したように思います。

11. 本当の大学紛争の終焉

一九七〇年四月に住友金属工業(株)に入社し、約三年間の和歌山製鉄所での実習と現場勤務を終えた後、一九七三年八月に淀屋橋の大阪本社に転勤して間もない頃、神戸地方検察局からの電話がありました。電話を取つた補助者が怪訝そうな顔をする中、何の用かと尋ねると、関西学院の大学紛争の際に、関学革新評議会主催のデモで負傷者を出した事件の裁判があり、デモの申請者となつていた私に、検察側の証人として証言してもらいたいとの要請でした。実質的に四年以上

前の出来事での呼び出しにびっくりしました。とりあえず、上司に事情を説明し、了承を得て裁判に出ることを了解しました。

指定された日時に、神戸地方裁判所に行きましたが、控室の前で、被告となっている全共闘の武闘隊長のような立場であった「K」氏とばったり出くわしました。紛争時は対立関係にありましたが、時間の経過でそうしたことはあまり気にならず、「裁判後の生活はどうするのか」と聞くと、「裁判が終わったら故郷に帰って結婚する予定」とのことでした。

裁判では、デモ当日の状況やその間に居た場所などの質問がありました。当時のロッキード裁判で「記憶にございません」という言葉が出ていましたが、私も全く同じような状況で、混乱する中で記憶も定かではなく「記憶にありません」と答えることが多かったように思います。裁判の最後に、「彼は裁判が終われば結婚するらしいので、裁判を早く終わってやって下さい。」と裁判長に要請したら、「それは私が決めることです」と一蹴されたのを覚えています。その後、裁判の結果がどうなったかは、残念ながら聞いていないのが心残りです。「K」氏がその後どうなったかもわかりません。ただ、投獄された全共闘学生を支えていた組織があるようで、いまだに同志が集まる機会を持っているとの情報がありました。

我々は、学生時代の熱い思い出として残っているだけで、風化してしまうのは仕方の無いものか…。

この裁判が、私の中では関西学院における大学紛争の終焉かと思っています。

以上

関西学院における大学紛争の歴史を、当時の資料や新聞記事を参考に整理してみました。五〇年以上前の短い期間の出来事ですが、本当にいろいろあったように思われます。時系列的に私の勘違いがあるかも知れません。また、参加した同志の個人名については。多くのメンバーが出入りしていたので、書き漏れがあれば失礼になるので最小限に留めました。若き頃の多くの同志諸君、ご容赦下さい。

最後に、平松一夫君が、本年度から関西学院理事長に就任しました。体調が思わしくない中、関西学院の発展を最優先するという思いが強いようで、健康に留意して頑張っていたいただきたいものです。出来る限りの応援はしたいと思います。

大学紛争から半世紀を経て、関西学院の正常化を目指して当時みんなで議論した、学生も参加する開かれた大学など、未来に夢のある関西学院にしてくれることを、大いに期待し、私の筆を置くことにします。

(二〇一九・七・一 七二歳の誕生日)

注記…写真は、関学革新評議会発行の写真集「苦悩」を、筆者が撮影して掲載しています。鮮明度が悪いのはご容赦下さい。



(2013年関学高等部同窓会にて)